

原発事故被害者 相双の会

連絡先

國分富夫(会長)

住所

〒975-0017

南相馬市原町区牛越字遠藤 88-3

電話 090(2364)3613

メール kokubunpi-su@hotmail.co.jp

事務局

鈴木宏孝 090-2909-6133(浪江)

関根憲一 090-4889-3726(富岡)

板倉好幸 090-9534-5657(南相馬)

事故から4年7か月後の現実



3.11のまま時間が止まった小高駅の駐輪場。あれから4年半過ぎてもそのままだ

県の発表でも11万人近くが避難

福島県が9月1日に発表した数字だけでも、原発事故による「関連死」1,959人(自死、入院患者や高齢者施設入所者の避難移動中の死亡、など)、県外避難者4万4854人、県内避難者6万2849人とされています。しかし避難指示区域外からの「自主避難」者は完全に把握していませんし、「関連死」も南相馬市など調査不十分な地域もあります。

「帰還」に向けた準備宿泊は始まったが

原発から20km圏内における地域でも、「避難解除」=帰還にむけて準備宿泊が8月31日から始まりました。

南相馬市小高区は「帰還予定」として約一千人が登録されました。しかし、原発事故前の住民1万2842人には程遠く一割にも満ちていません。

帰還の判断をした方々には、避難を余儀なくされ、地域コミュニティから無理やり引きはがされ、地域住民同士の関係を断ち切れ、人間らしい生活とその基盤を根こそぎ奪われ、今後どこに定着して生活したらいいのか見通しがたたない中で、せめて最期は故郷で迎えたいという被災者が多くいます。準備宿泊がはじまりましたが登録されたのは高齢者で最愛の家族とも別かれ分かれのままの方が多く、孤独死が心配され

ます。

なぜ若い働きざかりの方々は準備宿泊に
加わらないのか、故郷を思う気持ちは年配
者も若い方々も同じ、ただ若い方々は生活
のために仕事があること、子供たちを放射

能から守らなければならないこと、自分の
意志を殺して心配な生活は避けなければな
らないのです。ここまで追い詰めてしまっ
たのは東電と国です。

京都大学研究者らによる線量調査

放射能はもう大丈夫だと「避難解除」にむ
け国も行政も強引にことを進める中、9月2
3日京都大今中先生はじめ広島大など5名
の学者先生方による放射能汚染実態調査が
行われました。この間小高区川房行政区では
除染委員会を結成し、文部科学省の放射線量
計測では納得がいかないので、独自に全世帯
72世帯を調べてきました。そこで、信頼で
きる学者・研究者に調査を依頼しました。23
日には、学者先生方と川房行政区の方々もく
わわり総勢20名ほど参加しました。マスコミ
の方々も取材にきました。ほとんどの家の

除染は終わっていますが、それでも庭先は
0.5 μ Sv~1.0 μ Sv/時間、家の裏側は3~4
 μ Svのところもありました。

調査全体の報告は後に公表されます。相双
の会会報にも掲載します。川房地区はじめ住
民の方々にはこれから先のいろいろな判断
材料となると思います。



京都大学今中助教らによる調査

京都から家族で福島原発事故視察

家族で原発事故を見たいと現地に来られるのは少ない。私はありがたく感謝の気持ちでいっぱい
です。再稼働した川内原発立地の議員たちは福島に視察にもこないで、再稼働を認めてしまいました。
一旦事故が起きれば、全て奪われ死の街となり何十年、何百年も放射能と向き合って生きていかな
ければなりません。一人でも多くの方に視察にきていただきたい。

木原さんご家族のみなさん。遠い福島まで来ていただき有難うございました。(國分富夫記)

木原さん家族の感想

わたしたち家族3人は、福島原発事故の
今を知りたくて、原発事故から4年半が過
ぎようとする9月3、4日の両日、原発事
故の被災地をはじめて訪れた。京都に住む
私たちにとって福島は全く不案内でどのよ

うに訪ねて行けばよいか迷っていたが、幸
いなことに國分富夫様に連絡ができて、案
内をしていただくことができた。

初日は、仙台空港から国道6号と浜寄りの
県道を南下して、まず津波被害の状況を

見ることができた。山元町の中浜小学校や千年塔見学を皮切りに、釣師浜漁港、磯部の相馬市東日本大震災慰霊碑、小高区村上など。つづいて「除染作業中」の幟がひらめく小高区大田和からはじまる原発被災地のフレコンバッグの集積風景を國分様の説明を聞きながら見た。その後浪江の「希望の牧場」を訪ねた。二日目は宿泊地の南相馬から原発事故被災地の荒涼たる風景の中を、双葉町、大熊町、富岡町夜の森地区、楡葉町を経ていわき市まで南下、帰途は常磐高速道を北上、高い位置から福島第一原子力発電所の遠景を見ることもできた。2日間、運転しながらの國分様ならではの案内に心からの感謝を申し上げたい。以下に家族の感想を記させていただく。

一帯を知悉されている國分様から、ここには何があったか、だれが住まいしていたか、つぶさにご案内いただき、住むことのできなくなった昔日の景色に思いをめぐらした。とりわけ、原発事故によって生活設計を台無しにされた方々の苦難のほどが如何ばかりであるか、お話を伺ううちにわが身に起きたことのように怒りを感じざるを得なかった。私にとって今度の旅は、原発被害者のみなさまの活動と共にありたいとの思いに確固とした内実を与えた。これからは、福島原発事故は何であるかを知人・友人と話題にして、その思いを伝えたい。

(木原健一)

直接見て、聞き、沢山のことを感じ、考えた2日間であった。そのごく一部のご報告を。一つは國分様の奥様にお話を伺えたこと。奥様の話される避難生活の具体はこちらで得ていた知識とはその過酷さにおいて大きく異なった。静かに話される奥様の気持ちの思い言葉もなかった。もう一つ、「希

望の牧場」を訪れたこと。「希望の牧場」と言う名前がブラックユーモアに思える状況にありながら300頭余の牛たちの命を全うさせたいと闘っておられる吉沢さんの活動は、あまりにも命を軽んじるものへの告発だと思った。國分様はじめお会いできた方々に深く感謝いたします。

(木原和子)

原発被災地の福島を訪問して、最も強く感じたことは、やはり現地に立って体感したことは頭で考えていたこととは全く違うことであった。帰還困難地域と避難解除準備区域が道路一本で隔てられている不条理さはその場に立って初めて実感できることであった。また、実際に浪江町から双葉町に差し掛かる辺りで國分様に「そろそろ窓を閉めて下さい」と言われて、視覚、聴覚、嗅覚のどれでも感知することはできないにもかかわらず、放射線を浴びているという緊張感を強く実感したことも忘れることはできない経験であった。現地に行けたことをとても感謝しています。

(木原麻子)

第13回避難者訴訟裁判 集合時間のお知らせ

次回の避難者訴訟期日10月14日です。

今回は4名の原告本人尋問があり、開始時間はいつもより30分早く9時30分となります。

☆集合時間は8時30分です。

『 原発事故 と 精神的苦痛 』

◆大震災・原発事故後、多くの問題を抱え悩んでいる方が多くなっています。

原発事故後から数年経って発症する『遅発性PTSD（心的外傷後ストレス障害）』に苦しむ住民、住民を支援するも大変な業務量と心労に苦しむ自治体職員の問題。皆様のご参加を頂き、少しでも先の見える日が来ることを願うばかりです。



講 師 蟻塚 亮二 先生

《福島県相馬市メンタルクリニックなごみ所長》

《講師プロフィール》

- ◇1947 年福井県生まれ。
1972 年弘前大学医学部卒業。
- ◇2004 年に沖縄県に移住。
沖縄戦体験者の「晩発性PTSD（心的外傷後ストレス障害）」に取り組む。
- ◇2013 年4月から相馬市に移住してメンタルクリニックなごみ所長として原発事故による「遅発性PTSD」と向き合う。(昨年NHKETV 特集で紹介)。
- ◇日本精神障害者リハビリテーション学会理事、欧州ストレストラウマ解離学会員。
- ◇著書は「うつ病を体験した精神科医の処方せん」「統合失調症 とのつきあい方」(いずれも大月書店)「誤解だらけのうつ治療」(集英社)など。

時 間 2015年10月11日(日) 午前10時~12時

と ころ 原町区 ひばり生涯学習センター (本陣前三丁目6-2)

※ お車は、道路の反対側(センターの南側)の創価学会様の駐車場へ

資料代 500円

(蟻塚先生講演より)

「いつになったらこの街は昔のように賑わいを取り戻すのか、それとももう二度とあの賑わいは戻らないのか、それすらもわからない。…人は『白か黒か』といわれたほうが、いっときつらくても受け入れやすい。

『白でもなく黒でもない、灰色の状態』にほったらかしにされることには耐えがたい。そんな『どっちつかず』のあいまいな苦悩を毎日感じながら生活していると、些細な落胆にも、ふっと死にたくなる。…このような精神状況と、岩手・宮城と異なって福島県だけが自殺者が増えていることとは無関係ではないと思う。

主催 「原発いらない」放射能から市民を守る会 (連絡先 0244 - 32 - 0258 会長 國分 富夫)

後援 南相馬市 朝日新聞南相馬支局 福島民報新聞社 福島民友新聞社 相馬地方労フォーラム

「相双の会」 会報に ご意見を

是非ご投稿をいただき「声」として会報に載せたいと考えています。

匿名でもけっこうです。

電話 090 (2364) 3613 メール(國分) kokubunpi-su@hotmail.co.jp

